県立広島大学・ひろしま美術館連携公開講座

ねこの不思議

猫は古くから人間にとって身近な存在でした。人になつく猫は代表的なペットですが、人に従属せず、自由気ままでマイペースな動物です。それが猫の魅力でもあり、多くの芸術家や文学者を魅了してきました。本講座では、ひろしま美術館で開催される特別展「ねこがいっぱい　ねこアート展」に合わせて、東西における違いや、暮らしの中で見せる猫の様相、鋭い観察力で捉えられた姿態など、文学と美術の両面から猫の魅力に迫ります。

【日　時】　平成30年　第1回：5月26日（土）10:00～12:10
第2回：6月 9日（土）10:00～12:10
第3回：6月16日（土）10:00～12:10

【会　場】　サテライトキャンパスひろしま（広島市中区大手町1-5-3　県民文化センター5階）

〔第1回〕5月26日（土）	10:00～11:00	イギリスの作家たちが描いた猫	県立広島大学人間文化学部教授 天野　みゆき
	11:10～12:10	ねこの美術史（世界編）	ひろしま美術館 学芸課長 水木　祥子
〔第2回〕6月9日（土）	10:00～11:00	日本文学に登場するねこ	県立広島大学人間文化学部教授 遠藤　伸治
	11:10～12:10	ねこの美術史（日本編）	ひろしま美術館 学芸員 農澤　美穂子
〔第3回〕6月16日（土）	10:00～11:00	猫とアメリカ文学	県立広島大学人間文化学部准教授 栗原　武士
	11:10～12:10	「ねこ」の時代、それでも私は「いぬ」が好き。	ひろしま美術館 学芸部長 古谷　可由

【募集人数】　80名程度

【受 講 料】　無料

【対　象】　どなたでも

【申込方法】　往復はがきの往信面の裏に①郵便番号、②住所、③お名前（ふりがな）、④電話番号を；返信面の表に受講される方の郵便番号、住所お名前（「○○○○」様）をご記入の上平成30年5月10日（木）（消印有効）までに次のところにお送りください。

〒734-8558　広島市南区宇品東1-1-71
県立広島大学地域連携センター「ねこ講座」係
電話（082）251-9534

※受講案内は締切日以降にお届けします。なお、申込多数の場合は抽選となることがあります。
※申し込みにあたってお寄せいただいた個人情報は県立広島大学公開講座以外の目的には使用しません。

【主　催】　県立広島大学地域連携センター・公益財団法人ひろしま美術館

県立広島大学・ひろしま美術館連携公開講座

講座内容

天野みゆき 「イギリスの作家たちが描いた猫」

シェイクスピアの戯曲、サキの短編、ドリス・レッシングのエッセイ(『なんといったって猫』、T.S.エリオットの詩(『キャッツ―ポッサムおじさんの猫とつき合う法』)を読むと、作家たちが猫について書きながら、同時に人間の性質や人間関係が抱える問題について考察を深めていることがわかります。いろいろな猫の姿を味わいながら、そこに込められた思いを探ってみましょう。上記T.S.エリオットの作品は、ミュージカル『キャッツ』の原詩です。

水木祥子 「ねこの美術史(世界編)」

家猫の歴史は古代エジプトから始まると言われています。猫を神として崇めたエジプト人に対して、キリスト教を信仰した西洋では、「悪魔の化身」とみなし、猫を迫害している図像も描かれました。近代社会へと移行するにつれ、ペットとして愛されるようになると、猫の肖像画も描かれるようになります。古代エジプトのバステト神から印象派が描いた愛らしいペットとしての猫まで、世界の美術でねこの歴史を紐解きます。

遠藤伸治 「日本文学に登場するねこ」

小説に登場する猫といえば、多くの人が漱石の『吾輩は猫である』を思い浮かべるのではないでしょうか。他には、谷崎潤一郎の『猫と庄造と二人のおんな』も猫が登場する文豪の名作です。現代小説に目を向ければ、村上春樹の『海辺のカフカ』や『IQ84』にも数多くの猫が登場します。これらの作品を紹介しながら、たしかに「不思議」という言葉がぴったりの猫の魅力について考えてみたいと思います。

農澤美穂子 「ねこの美術史(日本編)」

日本では、弥生時代にはすでに猫がいたことがわかっていますが、文献にはっきりとした記録が残っているのは、平安時代からです。当時ペットとして貴族に愛玩された猫は、今日に至るまで人々の傍らに、様々なかたちで存在してきました。愛すべき対象とされる一方、妖怪猫などミステリアスな存在とも見られており、美術作品の中にもさまざまなかたたちで表されています。そうした作品を中心に、日本における「猫」を考察しました。

栗原武士 「猫とアメリカ文学」

アメリカ文学において猫はどのように描かれてきたのでしょうか？その答えを探るため、今回はアメリカ短編の名手であるエドガー・アラン・ポーとレイモンド・カーヴァーという二人の作家の作品をとりあげます。時代を超えて受け継がれるイメージと変わっていくイメージの両方に目配りをしながら、魅力的に描かれる猫の姿を皆さんと共有したいと思います。

古谷可由 「「ねこ」の時代、それでも私は「いぬ」が好き。」

「いぬ」とともに最も身近なペットとして愛され続ける「ねこ」。美術のなかでもともに繰り返し取り上げられてきました。それでも、犬派・猫派と完全に分かれるように、常に対照的な動物としてみなされています。あえていぬ年に「ねこ」を語るこの連続講座の最後は、「いぬ」との対比の中で「ねこ」にまつわる美術表現について考察していきます。